
怨念さん

ユリイカ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

怨念さん

【Nコード】

N5203R

【作者名】

ユリイカ

【あらすじ】

バスの中で会った変な人との関わり合いの話です。

穏やかな陽気の日だ。

私は今日もいつも通り会社に向かう。

バス停に向かう途中、園児が幼稚園のバスに乗り込む光景が見られる。私はこの光景が好きだ。多分誰でも平和を感じる瞬間というものを持っているのだと思う。

だが、日常があまりにも平和の繰り返しだと、しばしば些細な事が気になってしまう時がある。

今の私にもそれがあるのだが、まあ、本当に些細な事である。

私の家は比較的、山手の方にある。そこからバスで会社に通っているのだが、バスに乗っている時間だけで一時間近くもある。

慣れればどうって事は無いが、たまに一度も座れなかったりすると気分が悪くなる。今日は何とか座る事ができた。

ただ、座れば万事OKというわけでも無い。

今日もどうやら危惧していた事が起こってしまったようだ。

一、二ヶ月前から、よく顔を見る人がいるのだ。ほぼ毎日会う上に、降りる場所も同じで、更には座る位置も大体近くになる事が多い。今日に限っては、隣だ。

ここまで来れば何か喋るべきだろうが、男同士というのはフランクな付き合いというのはしにくいものだ。一度喋ってしまうと、それがどんなに嫌な人間でも、今後見かける度に喋り続けていかなきゃいけないのだろうか、等と色々考えてしまう。

今日も喋りかけずに一時間近くも過ごすと思うと嫌になった。

だがこの日は違った。向こうが話しかけてきたのだ。

「よく会いますなあ」

「そ、そうですねえ」

明るく、割と話しやすそうな口調で話しかけてきた。いい人かもしれない。

その男は尋ねてきた。

「あなた、どんな仕事しているんですか？」

「本の出版です」

「ほう、いい仕事ですね」

「あなたは？」

「いやあ、アコギな仕事ですけどね。しかも今は休養中です」

確かにこの男はいつもスーツを着ていないし、サラリーマンでは無いようだ。しかし服装はしっかりしていて、声もサバサバしているが上品だ。

続けて男が私に喋りかけてきた。

「お名前伺ってもいいですか？」

「ええ、本尾出須夫ほんおだすおと言います。」

「いい名前ですねえ。本当にいい名前だ」

「あなたは？」

「怨念です」

「は？」

男はいたずらっぽい表情を浮かべていた。

「だから、怨念です」

「はあ……怨念さんですか」

「はい、怨念さんです」

「……なんの怨念ですか？」

「ひよこです」

「ひよこ？」

「ひよこの怨念です」

「そうですか……」

私は『変な人に捕まってしまった』と思った。これからも通勤の度に、この変な人に付きまとわれるのだろうか……

「具体的にはカラーひよこの怨念です」

「別に聞いてませんけど………そういえば昔、動物愛護団体が騒いでしたね」

「ええ。ひよこに色を塗るなんて許せないですよね……」

「まあ……衛生上よくないから、死んじゃうみたいですね」

私は話を合わせるが、あまり面白くは無い。何だつてとうの昔に見なくなったカラーひよこの話をしなければいけないのだ。

だが、男は体をこちらに向けて更に話しはじめた。

「鳥インフルエンザって知ってますか？」

「ええ、最近更に強力になったインフルエンザですよ」

「強力になったのは、私の仕業です」

「は？」

「言ったでしょ、私、怨念だつて。怨念が人間の形を取ったんです」

「はあ……でもあれは、人から人にはあまり感染しないですよね？」

「今にするようになりますよ。そうすれば世界の危機ですね」

「はあ……まあそうですね」

「あ！あなたもしかして怨念を信じてませんか？」

「そりゃ……いきなり信じろって言われても難しいですね」

「ふむ。じゃあ3日後、見ていて下さい。日本を揺るがすような、

一大ニュースが起きますから」

「え！？」

「怨念と言つても運命ですから。もし私の予想が当たっても怒らないで下さいね」

それから男は一度も喋ってこなかった。

私は変な人に絡まれたと思い、嫌になったが、彼の予想への自信にも興味があつた。本当に何か起こるのだろうか。

それから3日経つたが、それまで彼は一向にバスの中に現れなかった。

その夜、リビングでテレビを見てみると、速報で首相が死んだというニュースが流れてきた。どのテレビ局も臨時で、一斉にそのニュースを伝えた。

彼の言った事は本当であった。首相の死を予想できるような材料は何も無かった。これは、彼が本当に怨念で殺したという事だろうか。

だが私はそれほど心動かされたわけでも無かった。彼のサバサバした感じが、マジシャンか何かのように見えたからだ。きっと何かトリックがあるに違いないと思った。

次の日、私がバスに乗ると、彼は図々しくも、隣の席を鞆で占領していた。私を見つけると、とびきりの笑顔で私を手招きした。

「見ましたか？昨日のニュース」

「ええ。どうして分かったんですか？」

「分かったのは当たり前です。私がやったんですから」

「それが信用できないんですよ」

「まあ確かに、未来なんてのは予想するものじゃありません。現象が起きている『今』が全てとの調和なんですからね」

「どついう事ですか？」

私が尋ねると、男の顔が少しじめな印象に変わった。

「全ての現象というのは調和しているんです。例えばブラックホールを考えて下さい。圧倒的な質量がブラックホールという現象を生むんです。もし圧倒的な質量があってもブラックホールが生じなければどうなると思います？物理法則が乱れるんですよ。そんな事はあってはいけません。だから調和を起こす為にブラックホールという現象が起こる必要があるというわけですよ」

「はあ」

「人類の歴史も同じです。今まで虐殺に次ぐ虐殺、奴隷制度、戦争、原爆、あらゆる負の行為を行ってきたわけです。それを今さら、知らんぷりできるとお思いですか？」

「うーむ。でもそれが、ひよこの怨念であるあなたと何の関係があるんですか？」

「家畜も同じですよ。鶏の場合は家禽かきんと言っんですけどね。産卵種

のひよこは雌雄を分ける為にメスは育てられますが、オスはゴミ箱行きです。そのまま圧死するか窒息死して終わりです。これを虐殺と言わずに何と言っんですか？」

「しかし……」

「生き延びたメスだって地獄です。鶏というのは日光に反応して卵を産みます。二十四時間産み続けさせる為に、電気を付けっぱなしにした小さなケージで卵を産ませるんです。鶏は翼をバタ付かせる事も、向きを変える事すらできない。そうして卵を産みすぎた影響で鶏は衰弱して死んでいきます。可哀想だと思わないんですか？」

「はあ……でもあなたはカラーひよこの怨念なんですよね？」

「カラーひよこというのは半分冗談です。でもカラーひよこは産卵種のオスなんです。つまりゴミ箱行きだったオスのひよこというわけです。皮肉にもゴミ箱行きのひよこより、買ってすぐ死ぬカラーひよこの方が長生きしているんです。面白いですね。ハハハ……」
「言いたい事は分かりました。あなたは動物愛護団体が何かですか？」

「まだ理解しておられないようですね。死んだ首相が浮かばれませんか？何ならもう何人が殺してみせましょうか」

彼の表情が一瞬にして冷徹な表情に変わった。

「そ、それは困ります。でも、どうしてそうまでして私に理解させようとするんですか？」

「別に……ただの暇つぶしですよ。私は何億羽も無駄に殺された鶏達の怨念ですよ。死んだひよこの数だけ人間を殺したって構わないんですから。それが調和というものですよ」

「そんなわけないでしょ！」

「どうしてそこで怒るんですか？人間がそれほど重要な存在だとも？神の視点から見ればひよこの命も人間の命も一緒ですよ。こいつが太郎君で、太郎君はいい奴だから生かしておこう、とか考えてると思っっているんですか？」

「いや、そういうわけじゃありませんが、命の事を言うなら、虫の

方が殺される数が多いでしょう？」

「良い所を突きますね。確かに意識の大きさは怨念にとっても重要なファクターです。だから虫の死は怨念にはなりにくいし、そういう意味では人間の意識が一番強いでしょう」

「でもあなた達は目を伏せている。家畜動物の知性にですよ。豚は鏡だって理解しているんですよ？つまり自己を認識しているんです。食肉にされる際、ハンマーで昏倒させられる時には悲鳴を上げて逃げまわります。それまで農場で育ててくれた人の裏切りを嘆いているのかもしれませんがねえ」

「……あなたと話しているとイライラしてきます」

「あなたがイライラしているのは自分にじゃないんですか？人類の正当性が崩れ去ったからじゃないんですか？自分の生きている人生というドラマが素晴らしいものだと思いたいかからじゃないんですか？家畜の悲惨な現実に比べれば、あなた達のやっている事は全部おままごとですよ」

「あなたねえ！」

「まあ、続きは今度にしましょう。数日の間に何人が殺しますから見ていて下さいね」

そう言ってバスの停車と共に、足早と男は降りていってしまった。

私は、彼を動物愛護関係のテロリストか何かで、首相を殺したのも団体の力なのだと思った。

何にせよ、あの男はとても付き合いにくい人間だ。もう相手にしない方がいいだろう。何人死んだって構いやしない。

それから数日はあの男に会わなかった。何人か死んだようなニュースが流れていたが、怨念の力かどうかなんて分かりやしない。私は考える事も放棄していた。

それからあくる日、それまでの事を忘れかけて普段の日常に気持ちに戻ろうとしていた時、その男は再び現れた。

だがいつもと様子が違い、妙にゲツソリとしていた。しかし相変わらず鞆を使つて隣の席を陣取つて私を招いた。

「お久しぶりですね」

「どうしたんですか？体調がよろしくないようですが……」

「私もそろそろ終わりのようです……」

「終わりつて、あなたは強い怨念なんでしょう？」

「いいえ、怨念というのは嘘です」

「やはりそうですか……環境テロか何かですよね？」

「いえ、それも違います……」

「え？するとあなたは一体何なんですか？」

「祈祷師ですよ。正確には元祈祷師ですがね」

「祈祷師？祈祷師がなぜこんな事を？」

「あなたは四国の祈祷師をご存知ですか？」

「いえ、知りませんが……」

「四国は異様に祈祷師が多いんです。地元では『拝み屋』とも言われますけどね。私もそこのある団体に居ました。祈りと呪いは表裏一体で、裏の世界では常に闘争が行われているんです。私も色々と学びましたよ」

「まさか、首相を殺したのも呪いつてやつですか？」

「人を呪わば穴二つ……呪いはかけた方にも返ってくるんです、それが調和というものです。全てはシナリオの一つ、首相が死ぬのも元から決まっていた事なんですよ」

「うーん……私は呪いとかは信じない方なんですけどね……」

「インターネットで検索してみればわんさか出てきますよ。最も、関わるのはオススメしません。金持ちが何千万円もつぎ込んで呪詛を依頼したり、すごい世界ですよ」

「でも、どうして私に怨念だと偽つたりしたんですか？」

「四国にいる時、ある日流れて来たんですよ。イメージが。祈祷師は誰しも靈感が鋭くて、稀に神と一体化したような体験をする人もいるのですが、私もそんな体験をした時、鶏達の言葉にならない思

いが流れて来たんですよ」

「それは私の人生を投げ出させるのに十分な量でした。と言っても、元々私は四国の拝み屋同士の闘争で呪詛を受けて、自分の命が長くない事を知っていたんですよ」

「そんな事が……」

「そして、最後を迎える場所をこの平和な町に決めて、二ヶ月前に引越してきたんですよ。でも死ぬ前に誰かと話したいと思って、最後にいつもバスで会うあなたに伝えようと思ったわけです。前にも言いましたが、暇つぶしですよ」

「凄まじい人生を歩まれたんですね。それに怨念が本当にあるとは思いませんでした」

「ふふ、でも鳥インフルエンザの事や、調和の理論はデタラメですよ。私がそう考えているだけです。信じなくていいですよ。ハハハ

……」

彼は力の無い声で笑ったかと思うと、病院のある停留所で降りてしまった。

私はその日、会社の中で一日中思案に暮れていた。

彼の言う事は全部デタラメで、実際はただの病弱な男だったのかもしれない。

しかし私には、死を前にした彼が、どこか達観しているように見えた。

男とはその日から会っていない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5203r/>

怨念さん

2011年3月10日20時10分発行